讃岐の狭岑の嶋にして、石中の死人を視て、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首。併せて短歌。					
玉藻吉 玉藻よし たまもよし (枕詞)	讃岐國者 讃岐の國は さぬきのくには 讃岐の国は	國柄加 國からか くにからに 国柄ゆえか	雖見不飽 見れども飽かぬ みれどもあかぬ 見ても見飽きない	神柄加 神からか かむからか 神の畏さゆえか	幾許貴寸 ここだ貴き ここだたふとき まことに貴い
天地 天地 あめつち 天地と	日月與共 日月とともに ひつきとともに 日月とともに	満将行 足り行かむ たりゆかむ 充ち足りてゆく	神乃御面跡 神の御面と かみのみおもと 神の御顔であると	次来 継ぎ来る つぎきたる 受け継いできた	中乃水門從 那珂の水門ゆ なかのみなとゆ 那珂の港から
船浮而 船浮けて ふねうけて 船を浮かべて	吾榜来者 我が漕ぎ来れば わがこぎくれば 私が漕いでくると	時風 時つ風 ときつかぜ 時おり風が	雲居尔吹尔 雲居に吹くに くもゐにふくに 雲居から吹くので	奥見者 奥見れば おきみれば 沖を見れば	跡位浪立 跡位浪が立ち とゐ波が立ち 波がうねり
邊見者 邊見れば 辺見れば 岸を見れば	白浪散動 白浪散動 白波立ち 白波が立ち	鯨魚取 鯨魚取り いさなとり (枕詞)	海乎恐 海を畏み うみをかしくみ 海が恐ろしくて	行船乃 行く船の ゆくふねの 行く船の	梶引折而 梶引き折りて かぢひきをりて 梶が折れるほどで
彼此之 をちこちの をちこちの あちこちと	嶋者雖多 島は多けど しまはおほけど 島は多いが	名細之 名くはし なくはし 中でも	狭岑之嶋乃 狭岑の島の さみねのしまの 沙弥島の	荒磯面尔 荒磯面に ありそにも 荒い磯に	廬作而見者 庵りて見れば いほりてみれば 庵を作つて見ると
浪音乃 波の音の なみのとの 波の音の	茂濱邊乎 繁き浜辺を しげきはまへを とどろく浜辺を	敷妙乃 敷栲の しきたへの (枕詞)	枕尔為而 枕になして まくらになして 枕にして	荒床 荒床に あらとこに でこぼこの床に	自伏君之 ころ伏す君が ころふすきみが 伏している君の
家知者 家知らば いへしらば 家を知っていたら	往面毛将告 行きても告げむ ゆきてもつげむ 行つて告げよう	妻知者 妻知らば つましらば 妻を知っていたら	来毛問益乎 来も問はましを きもとはましを 来て声をかけよう	玉粹之 玉粹の たまほこの (枕詞)	道太尔不知 道だに知らず みちだに知らず 道すら知らず
鬱悒久 おほほしく おほほしく 心配して	待加戀良武 待ちか恋ふらむ まちかこふらむ 待ち焦がれよう	愛伎妻等者 はしき妻らは はしきつまらは いとしい妻は			万葉集 卷二 220 柿本人麿